第９回糸賀一雄記念未来賞・じゅんちゃん一座（青森県十和田市）
座長 竹内 淳子さんのスピーチ

このたびは、私たち「じゅんちゃん一座」を糸賀一雄未来賞という大変栄誉ある賞に選んでいただき、深く感謝申し上げます。「じゅんちゃん一座」という団体での受賞ですが、座長である竹内がお話をさせていただきます。また、お集まりの皆さんに、一座の魅力・実力を体感していただきたいと思い、一座メンバーが駆けつけていますので、ダイジェスト版ではありますが、ご披露させていただきたいと思います。

さて、私たちの活動の本拠地は青森県の十和田市です。青森県というと「津軽」が有名ですが、十和田市は地理的には青森県の東側に位置し「南部」に属しています。その十和田市では、レジェンドと呼ばれた脳外科医が中心になって、2005年から年に一回、地域住民を対象にして「もの忘れフォーラム」が開催されていました。今ほど認知症は注目されていない時期でしたが、その先生のそれまでの医療での功績もあり、人口6万人程度の市にもかわらず、その会には毎年500人以上の一般市民が集まり、地域の中で注目のイベントになっていました。そんななか、地域住民から、「寸劇を見て認知症を勉強したい」という声があがったのが、2011年でした。十和田市の公立病院の精神科医である私が、自分の仕事上の、そしてプ

ライベートのネットワークを駆使し、認知症をもつ人たちとの関わりに熱意をもち、なおかつ芸達者な人たち一人一人に声をかけ、認知症の普及啓発を目的としたボランティア団体「じゅんちゃん一座」を2011年12月に立ち上げました。メンバーは活動がはじまってから12年の間に多少の変化はありますが、医師や精神保健福祉士らの医療分野、介護支援専門員、介護福祉士らの介護分野、保健師や市役所職員などの行政分野、そして一般住民と、多様なバックグラウンドをもつメンバーからなっています。「じゅんちゃん一座」という名前は、わたしの名前「竹内淳子」の「じゅんこ」からとったものです。

私は精神科医として、たびたび一般住民を対象にして認知症についての講演を行っていましたが、情報を一方的に伝えるだけでは、変化を起こすのは難しいことを痛感していました。なので、寸劇を用いた一座の公演を、見ながら楽しく学ぶ、エデュケーションでもありエンターテイメントでもあるという、「エデュテイメント」にすることにしました。「見て！聴いて！笑って！学ぶ」です。具体的には、精神科医師である私がはじめにミニレクチャーを行い、その後に地元の方言である南部弁を用いた、ドリフターズのコントを彷彿とさせる面白みのある寸劇を行います。寸劇は、不適切な対応例と適切な対応例の二場面で、公演は講義と寸劇がサンドイッチになっています。寸劇は、コント仕立てではありますが、精神科医の私が監修していることもあり、医学的に正確なものです。

この「笑える寸劇」で、「認知症講演会」にありがちな堅苦しさ、聴衆に漂う暗さ、深刻さや不安感を払拭することができました。そして、「笑っている内に、勉強することができる」と多くの市民に受け入れられ、地域の中で人気も出て、公演依頼がたくさんきました。しかしそこに課題も見えてきました。それは、見に来てくれるのは、自分が認知症になったら、いやもうなっていたらどうしようとか、実際に認知症をもつ人、配偶者や親を介護している高齢者がほとんどだったということです。

たしかに高齢者に見てもらうことで、高齢者の認知症に対しての知識は増え、友達同士で認知症が話題になり、「あの人受診したから私も受診してみる」とか、家族を受診させようという人、認知症の早期の段階で病院を受診する人が増えました。しかし、医療につながった人が増えただけでは認知症をもつ人は幸せにはなりません。残念ながら、認知症は完治することが難しく、薬も1年半程度認知症の進行を遅らせるというものなので、受診して診断されたことが、かえって本人や家族の不安を高め、絶望させてしまうこともあると言われています。そういう「早期診断・早期絶望」にならないように認知症をもつ人を受け入れる素地ができているとはいえませんでした。

そこで、認知症をもつ人が望む暮らしが、望む場所でなされるような地域にするために、もっと若い世代、これからの地域を担う子ども、そして働き盛りの世代に働きかけることにしました。まず、小中学生への認知症の普及啓発を目的に、一座メンバーがそれぞれの生活者としてのネットワークを活かしPTAに働きかけたり、仕事上のつながりを活かし校長会に働きかけることで、学校での公演・出前授業を2012年に実現させました。また職場のメンタルヘルス研修の中に認知症に関する講義を取り入れるよう、2014年に青森県知事に働きかけました。そして2016年から青森県庁の全職員が認知症サポーター講座を受講することになりました。また十和田市では、市役所人事課に働きかけ、2014年から職場のメンタルヘルス研修で、そして2015年からは、新人研修で、一座が講義を受け持つことになりました。さらに、警察署や消防署の職場のメンタルヘルス研修でも、一座が講義をうけもちました。それは実施

しただけにとどまらず、警察・消防との人的ネットワークの構築につながりました。
　ところで、一座は12年の活動で、8つの寸劇を作りました。寸劇のテーマは、その時々、地域において認知症や高齢者の生活のトピックになっていること選んでいます。第一作は、認知症の物盗られ妄想を主題にした「姑vs嫁　絶対おまえが盗ったんだ」、2作目は「認知症をもつ人のひとり歩き」をテーマにした「おじいちゃんのおつかい　俺はまだまだ現役だ」、3作目は介護うつをテーマにした「長男はつらいよ　　俺はスーパーマンじゃない」、4作目は特殊詐欺をテーマにした「渡る世間は詐欺ばかり　わに限って騙されるわけねえ！」、5作目は幻視などの症状がでるレビー小体型認知症をテーマにした「和田家の怪談　おらには見える。わがってけろ」、6作目は運転免許返納をテーマにした「和田黄門　このカードが目に入らぬか！」、7作目は若年性認知症がテーマの「相棒振り向けば君がいる。前見れば友がいる」、8作目は高齢者てんかんがテーマの「バババンキシャ！スクープ爺は撮った！」です。
　そして、特殊詐欺をテーマにした寸劇では、寸劇のシナリオを警察と一緒に考え、さらに実際の寸劇に警察官が警察官や詐欺師役で、地域の見守り隊、金融機関もその役で出演しました。免許返納の寸劇でも警察が参加しました。このように、寸劇を作る、公演するという過程は「協働」作業であり、この過程を通じて、わたしたちは認知症をもつ人が地域で暮らしていくために地域で核となる人たちとの関係の構築を促しました。
　また、一座の親しみやすさは、課題を抱えている地域、たとえばまだまだ偏見が強く認知症を隠すような地域であっても、住民に受け入れられやすく、そのような地域では啓発とこれからの展開に種をまく役割をはたしました。また、一座の活動は、それぞれの地域で関係機関がネットワークを作っていくときのロールモデルにもなりました。市民活動がもりあがってきている地域では、一座はそれらの活動がさらに大きく育つための肥料、触媒的な役割も果たしてきました。
　その結果、一座は2023年10月末時点で、公演回数は出前公演、招聘公演含めて220回になり、約3万人の方に見ていただきました。2019年8月には青森県40市町村全部で実施、日本全国では現時点で11道府県で公演しています。
　このようにして一座は、第一の活動目的である、普及啓発、認知症をもつ人が自分の住み慣れた地域で安心して暮らせるための地域づくり・人づくりを行い、世代や病気・障がいなどによって支援が必要かどうかにかかわらず、「地域まるごと、ごちゃまぜ」で取り組む必要があることを十和田市の周辺の市町村にも広げ、さらにそこから広域に波及させてきました。
　そして第2の活動の重点は東日本大震災の被災地支援です。震災後、東北では認知症をもつ人やその家族の孤立やケアの在り方などが問題になっていました。特に岩手県の沿岸にあり津波の被害も大きかった洋野町には継続的に支援を行っています。洋野町は、元々高齢化率が高い漁業の町で、震災後漁場の復興が遅れ、働き手が県外へ流失しており、残された高齢者同士での地域づくり・仕組みづくりが急務で、保健・介護に関わる人たちの危機感は非常に高いものでした。そういった切迫感をもった洋野町からのリクエストがあり、コロナ渦においても厳重に感染対策を行い、公演を通じて支援を行い、2023年8月に３回目の公演を実施しました。
　津波で被災した地方都市である宮城県名取市では、地域支援を志す有志向けに、地域づくり・サポーターづくりのための公演を2019年に実施しました。現在ではその有志たちが地域づくりの核・種となり、さらにその活動を別地域に繋げる活動を継続しています。
　地震・津波の直接被害だけでなく、福島第二原発による被害をうけた福島県に関しては、2019年に福島県国見町での公演を予定しました。しかし、公演の前日、国見町まであと数キ

口のところまで出向いていましたが、台風19号が直撃した結果、国見町までの道路が寸断され、あえなく公演を延期、コロナ渦を経て2023年9月に公演をすることができました。

さて、活動の第3ポイントは、コロナ禍においていかに一座の活動を継続していくかでした。コロナ渦においては、当然ながら、公演はできませんでした。しかし、現実場面に目を向けると、デイサービスが休止されたり外出を控えざるをえなかったことから、認知症をもつ高齢者は孤立したり、日々の生活に生き生きとした感じがなくなったり、フラストレーションがたまったりしていました。あわせて学校が休みになり子どもたちが家にいる時間が増えたことで、認知症をもつ高齢者と家族との関係が悪化したり、葛藤を深めている家庭がたくさんありました。こういうときこそ、一座が活動しなければならないのに、公演は最も実現が困難な手法でした。そこで私たちは、直接のコミュニケーションが制限される中で、認知症をもつ人たちへの適切な支援のあり方や、認知症と共生する社会を作り上げていくための方法を模索しました。

そこでまず行ったのは、ソーシャルメディアやラジオという媒体を用いることでした。2021年1月17日には、ニッポン放送制作『中村こづえのSUNDAY HAPPY MAP』、2021年3月1日には、ニッポン放送『阿部亮のNGOの世界一周』に出演しました。また、ソーシャルメディアも多数活用しました。まず、じゅんちゃん一座のFacebookに新たに作成した「特殊詐欺防止のための動画」を投稿し、急増していた特殊詐欺の注意喚起をおこないました。またスマホアプリの「ラジオトーク」を用いて、ラジオ番組「じゅんちゃん一座のつながるラジオ」を立ち上げました。「つながる」には、「ラジオがつながる（聞こえる）」、「じゅんちゃん一座とみんながつながる」、「（ラジオを聴いている）人と人がつながる」、「アフターコロナにつなげる」という4つの意味を込めました。そして、いままで演じてきた8つの寸劇のシナリオを作り直して、ラジオドラマ化して配信しました。

また、「突撃！となりのスーパースター」という企画を実施しました。認知症をもっていても、ある分野においては援助する側といわれる私たちよりも高い技能をもった方々を「隣のスーパースター」と名付け、その方々にインタビューして配信しました。「じゅんちゃん一座のつながるラジオ」は、定期的に配信され、2023年10月末で31回配信しました。

さらに、一座のファンが集まってできた「じゅんちゃん一座応援隊」の一員である認知症をもつ高齢者が、一座メンバーに郷土料理を教えるクローズドのイベントを開催し、そのお料理教室の動画をFacebookに投稿しました。

寸劇のDVDも制作し、コロナ渦で出向くことができない、12年間の活動の中で関わりを持った機関、グループ、人達ら計108件にそのDVDを配布しました。このDVDは、職員研修会、小規模の認知症普及啓発座談会などに活用していただいています。またコロナが終息したら、実際に公演に参加したいという声も多数あり、コロナが第5類に変更後、すぐに公演の依頼をしてくれる人たちもいました。

これらのコロナ渦の活動は、直接に対面することは少なかったけれど、従来の「顔のみえる関係づくり」をより深めた「人となりが見える関係づくり」につながりました。

そして、2023年は、高齢者の緊急時の医療アクセスの改善に取り組みました。十和田市は高齢化率が約30%、令和2年の時点で27833世帯あるうちの約3割、8999世帯が高齢者のみの世帯でした。しかも高齢者世帯の約3割、約3000世帯が単身世帯であり、その数は年々増加し、高齢者の緊急時の医療へのアクセスが大きな課題になっていました。そこで十和田市は、高齢者や障がい者などの救急搬送時における安全、安心を確保することを目的にかかりつけ医療機関、持病、服薬中のお薬などの医療情報や緊急連絡先などの情報を専用の容器にいれ、自

宅の冷蔵庫に保管する「救急医療情報キット」の利用を広げようとしていました。市の広報誌などに記事を載せるものの、認知度は低いままで普及は今ひとつでした。このことから、一座に市から救急医療キットの普及に関して協力依頼がありました。そこで、2023年は、一座は救急医療情報キットと認知症を組み合わせた寸劇に取り組んでいます。

市が考えたのは老人を対象とした大規模な大会で一座が公演することで広報するというものでしたが、私たちはそのやり方だと特定の高齢者、つまりそういったイベントに参加するような元気な人たちにしか情報がつたわらない、本当に救急医療キットを必要としている人たちに広がらないと考えました。そこで町内会単位で公演を行い、その場には市の担当職員も同席することで、公演終了後すぐに救急医療キットを申し込めるように工夫し、いま、各町内会をまわって公演をしている最中です。また、この寸劇には、認知症高齢者、地域住民、消防署員なども出演しており、この企画を実施することで、町内会組織、地域住民、行政、消防署との連携が生まれ、地域まるごとのとりくみになってきています。

一座は、発足当初は認知症普及のための伝達の媒体という位置づけでしたが、徐々に「認知症の人たちと共生できる地域」や「地域まるごと・ごちゃまぜ」が実現する地域づくり・ひとづくりのために非常に多くの役割を果たす、多機能ツールになっていきました。一座は、人や機関をひきつける磁石であり、そしてそれらをつなげる鎖として機能しました。また学校現場や職場で認知症の研修をするのはハードルが高いといわれていましたが、それらの壁をうちくだくハンマーにもなりました。もしかしたら壁はなくて、ただドアに鍵がかかっていただけだったかもしれない。そのドアの鍵を一座もち、ドアをあけることができました。地域の人に認知されるうちに、認知症とは関係ないイベントであっても「じゅんちゃん一座がくる！」と一言ポスターにのれば、それだけでイベントにたくさんの人が集まるというような現象もおきました。一座は優秀な広告ツールでもありました。さらに東海大学においては、1年次必修科目の地域コミュニケーション論の授業の中で、一座の活動が地域コミュニケーション活動の一例として取り上げられ、公演を収録したビデオが活用されるなど、教材にもなりました。そして、一座とともに地域づくりをしたい地域も増え、一座の公演の依頼先の3割から再公演依頼がきているというように、一座はロールモデルでもあり、共に走る者でもありましたし、それぞれの生活、地域で頑張っている人たちへの強力な応援団でもありました。

でも一座のよさ、パワーは、私が一方的にお話するだけでは十分に伝えることができません。是非、一座の寸劇を見ていただきたいと思います。今日みていただくのは、記念すべき第一作「姑vs嫁　絶対おまえが盗ったんだ！」のダイジェスト版、改め、糸賀一雄未来賞授賞式バージョンです。

寸劇は2場からなり、まずはじめは、不適切な対応の例です。

認知症の症状がではじめたおばあさんとその一家のある朝の様子です。

オリジナル版では、卵ばかり買ってくる、洋服を上手に着ることできない、朝ご飯を食べたのを忘れる、自分はぼけていないと強くいいはるといった、いろいろな認知症の症状も演じているのですが、今回の特別バージョンでは、症状のなかでも特に家族内に軋轢をうみやすい「もの盗られ妄想」のところを抜粋してみました。

それではご覧ください。

ーーーーーーーーーーーー寸劇（不適切な対応例）ーーーーーーーーーーーーー

ナレーション　ここはとある町のごくごく平凡な一家。とても物静かだけど、いざというときに頼りになるお爺ちゃんと
お爺さん　どーもー
ナレーション　昔からおっちょこちょいで、せっかちなところのあるお婆さんと
お婆さん　どうも、どうも～
ナレーション　そして親思いだけど短気な長男
長男　どうも
ナレーション　東京から嫁いだ元カリスマモデルのお嫁さん
お嫁さん　どうも
ナレーション　の4人暮らし。毎日が平和で笑顔の絶えない一家でしたが、最近お婆ちゃんのもの忘れが気になるようになってきました。普段はあまり気になりませんが、よくものを置き忘れたり探せなくなったりしています。そんなお婆さんですが、今日は月に１回の病院受診の日のようです。それではみてみましょう。
長男　病院に行くのに、ちゃんと財布どがもったどが
お婆さん　おお、持った持った、大事なのはいっつもここに入っている
（※カバンから次ぎ次ぎだす）
これだべ（※診察券）これだべ（※飴）これだべ（※巾着）これこれ財布よ
（※巾着を長男が開けてみる）
お爺さん　なんだこれ
長男　入ってないべな、早く探してこい
ナレーション　病院へ行こうとしましたが、財布が見つからないため、お爺さんとお婆さんは部屋まで戻り再び財布を探すことになりました。
お婆さん　最近いっつも、こうやってものが無くなるんだよな～。どうしたことだべ
長男　あったか？早ぐしないと病院、混んでくるんで
お婆さん　おかしいな。いっつもここさ置くんだよ、昔っから大事なものはここに置くから、ここ以外にやるわけねえはずだ
お爺さん　ちゃんとみだどが
お嫁さん　みんなで騒いでどうしたの？
長男　財布がないって、騒いでらんだよ。
お嫁さん　あれ、お婆さん、昨日お部屋掃除したときありましたよね、お財布
（※みんなで探す）
お婆さん　ちょっとじっちゃ、こないだからおかしいと思ってたけど、あれだごった、あれが全部持っていってらごった。あれだっきゃ、掃除したりなんだりで、いっつも、おらの部屋さ入ってるもの
お爺さん　まさがえ
お婆さん　じっちゃ、ちょっときいできてけろ
お爺さん　えー。ちょっと嫁っこ。まさがど思うけど、婆の財布もって行ってないよな
お嫁さん　何言っているの、そんなことするわけないじゃない
長男　なに、そったらごどしゃべっているのよ、財布もっていくはずねえべ。なし

て家の人の財布もっていくって。もって行っても意味ねえべ
お嫁さん　あ、あった、テーブルの下にあったわよ、お財布。何かあれば私のせいにして、頭にくる。実家に帰らせてもらいます
長男　何しゃべってらのよ、そったらわげねえべ。自分がそこにおいで忘れだんだ
お爺さん　もうちょっと優しくしゃべったらいがべな
お婆さん　あの嫁、今こうやって騒いでらすけ、自分で隠したの持ってきたごった
お嫁さん　そんなことするわけないじゃない、いつも何かあれば私のせいにして。
長男　そったらごといっているんだば、施設さ入れるぞ
お婆さん　施設だば、じっちゃだな
長男　二人とも施設だ（※がやがや騒いで退場）
ナレーション　こうして、財布は見つかりましたが、家族全体が険悪な雰囲気になってしまいました。

ーーーーーーーーーーーー寸劇（不適切な対応例）終了ーーーーーーーーーーーー

このように、認知症をもつ人の具体的な言動をみてもらうとともに、周囲の人が認知症についての正しい知識をもたずに感情のままに振る舞うと、認知症をもつ人と周囲の人との関係性が悪化していく状況をまずは見てもらいます。
　そして次の場面では、どのように解決していけば,どう対応したらよいのかというのを見てもらいます。

ーーーーーーーーーーー寸劇（適切な対応例）ーーーーーーーーーーー
ナレーション　今日は病院へ行く日でしたが、お婆さんは財布をどこに置いたのか忘れてしまいました。
お婆さん　おかしいな、やっぱりないな。最近いっつもこうやって無くなるんだよな
あ、なしてだべ。
長男　どんだ？あったどが？いや、こういう時は、やさしく声をかけて、一緒に探すようにって病院の先生が言ってたな
おばあちゃん、どうしたの？
お婆さん　いや、やさしくて気味が悪いな、いや財布がないんだよ、いっつもここに置くんだけど
お嫁さん　みんなで騒いでどうしたの？
長男　また財布ないってよ
お嫁さん　そうなんだ~、おばあちゃん、一緒にさがしますねぇ
お婆さん　ありがとう、頼むな
長男　あ、おい、ばば・・・じゃなかった、こういう時は本人に見つけさせるようにしなさいって病院の先生言ってたな。ここに置いたら、さすがの婆もわがるべ
（※見つけやすい前に置く）
お婆さん　あ、あった。さっき、ここに置いだったんだよ
お嫁さん　良かった～はやく病院に行ったほうがいいね

長男　　さ、病院さ行ぐべ（※みんな退場）
ナレーション　こうして無事に財布も見つかり、険悪な雰囲気になることなく、病院へ出かけることができました。

ーーーーーーーーーーーー寸劇終了ーーーーーーーーーーーー

　この寸劇では、適切な対応である、ゆっくり穏やかに話す、お財布を自力で探せなくなったお婆さんのプライドを傷つけない工夫、この場合は、「大事な財布も探せないお婆さん」とならないように、まずは一緒に探して、お婆さんに財布を見つけさせる一手間、一工夫をすると言う対応法を具体的にみせています。そうすることで、実際の場面でのお手本になればと思っています。
　そして認知症をもつ人とつきあうことは大変なことも多いけれど、学びもあるし、ちょっとした工夫で状況が好転するというポジティブなメッセージを発し、認知症をもつ人、その周囲の人に元気を与えます。また認知症をもつ人もその周囲の人も、お互い笑顔でいられる地域でいられるように、一歩を踏み出しましょうというメッセージを伝えておわりになります。
　ここまで一座の活動のお話をさせていただきましたが、これからも一座は、誰もが安心・安全に住みつづけられる街づくりを目指し、今までの実践で積み上げてきたノウハウを利用し、地域の「元気」「繋がり・繋がるネットワーク」の種となります。そしてその種を多くの地域で播き、育て、また種が実ったら、別のところに運び運ばれ、播いたり播かれたりしながら、進んでいきます。そして認知症をもつ人のみならず、誰もが安心・安全に住みつづけられる街づくりをめざし、「地域まるごと・ごちゃまぜ」で見守っていく社会の実現に向けて取り組んでいきます。今回は本当にありがとうございました。